行末とはき　世の春を
いかに樂しく　夢みつゝ
こゝらの月日　すぎけむを
あはれ幸なき　わが友よ」
病める友をば　たすけつゝ
曾て遊びし　その浦に
君病みまして　今ひとり
さまよふ心　如何ならむ」

＊　＊　＊　＊　＊

涙に似たる　春の雨
物思ふ窓に　灑く夕
世をうくひすの　聲おいて
垣の紅梅　花は落ちぬ』

友のつどい

つねを

まなひの窓のはらからよ
今日のつどひの嬉しさに
幼なごころのうつくしく
ともに語らんいつまでも
心の友のこゝかしこ
群れあふれたるこのむしろ
はたるも雪もおもはずて
樂しき節をあはせまし

花の袂

仝人

かすむ春野に　もえいづる
すみれ蒲公英　つくづくし
はなの袂に　あまるまで
摘むうれしさを　門にまつ
わがたらちねに　ささげてむ